



取材レポート②



燕三条 工場の祭典 2026



工場の祭典とは？

「燕三条 工場の祭典」は、2013 年に始まったオープンファクトリーイベントです。燕三条地域の工場を開放し、普段は見ることのできない製造現場を見学・体験してもらうことで、職人の技やものづくりの背景、その価値を伝えてきました。工場を訪れ、人や技術に触れることを通じて、ものづくりの魅力を発信し、地域の誇りや新たなつながりを育む取り組みです。

公式サイト▶



今年テーマは「人が、ひらく。次の一歩をひらく。」です。県央地域の製造業を中心に、過去最多の158拠点が参加しました。工場の見学ツアーやものづくりを体験できるワークショップなど、各会場でさまざまな企画が行われました。

普段はなかなか入ることのできない工場の内部を訪れた来場者は、間近で見る機械の動きや職人の技に興味津々。職人の技やものが生まれるまでの工程に触れることで、燕のものづくりの魅力を体感できる貴重な機会となっています。

人と人との出会いや交流から新たな気付きや興味が生まれ、ものづくりの未来をひらいていく。そんな「次の一歩」につながる4日間となりました。

見て、触れて、感じる。
燕のものづくり

取材レポート①

酒吞童子伝説とは？

分水地区の砂子塚に生まれた外道丸。幼いころから乱暴者で国上寺に預けられ、母の死をきっかけに仏道の修行に励むようになりました。

外道丸は、まれにみる美男子だったため、娘たちから恋文が山のように寄せられましたが、それには目を向けず修行を続けました。

ある日、返事が得られないことを悲観した娘が命を絶ちます。その知らせを受けた外道丸が恋文の詰まったつづらを開けると煙が立ち上り、たちまち鬼の顔に変わり果て「酒吞童子」となりました。その後、京都で暴れた酒吞童子は源頼光らに討たれてしまいます。

伝説には「最強の鬼」伝説や「悲劇の英雄」説、「一流の職人」説など多様な姿が語られていますが、燕市では、「極悪」ではなく、人並み外れた力を持ち、人々のためにその力を振るってくれる伝説の存在として、お祀りしています。



越後くがみ山

酒吞童子行列

題字：金澤翔子さん

伝説の鬼・酒吞童子が鬼軍団を従え、心願成就を祈りながら道の駅SORAIRO 国上周辺を練り歩く「第21回越後くがみ山 酒吞童子行列」を9月27日に開催しました。

イベントでは、太鼓の演奏やキッズダンス、飲食コーナーやワークショップなども行われ、子どもたちはフェイスペイントや手作りの鬼の角を着けて参加。泣き出す子どももいれば、記念撮影を楽しむ家族連れも多く、会場は大いに賑わいました。

